

審査の結果の要旨

氏名 二藤 隆春

本研究は、成人男性に発症する遺伝性の下位運動ニューロン疾患であり、球麻痺を主症状のひとつとする球脊髄性筋萎縮症 (Spinal and Bulbar Muscular Atrophy) の嚥下機能障害像を明らかとするため、嚥下造影検査、嚥下圧検査による解析を試みたものであり、下記の結果を得ている。

1. CAG リピート数と四肢筋力低下および嚥下困難感の出現年齢は有意な負の相関関係を示し、CAG リピート数が大きいほど四肢筋力低下および嚥下困難感の出現年齢が若年化することが示された。また、筋力低下が出現してから嚥下困難感が出現するまでの期間は、筋力低下出現が高齢であるほど短縮することが示された。
2. 全例で軽度から中等度の舌萎縮・繊維束攣縮がみられたが、軟口蓋麻痺は一部の症例でのみ認められた。嚥下困難感のある症例において咽頭の唾液貯留が認められたことより、咽頭クリアランス低下による咽頭残留が嚥下困難感の原因のひとつになっていることが示唆された。
3. 嚥下造影検査を行ったところ、食塊移送などの口腔期の障害に比して、舌根後方運動や咽頭収縮、咽頭残留などの咽頭期の障害が存在する症例の割合が多く、かつ障害もより重度であった。嚥下困難感のない症例でも咽頭期の障害が存在する症例が存在しており、球脊髄性筋萎縮症においては、咽頭期の障害から出現し、やがて口腔期の障害も出現し、両者が徐々に増悪していくことが明らかとなった。
4. 嚥下圧検査を行ったところ、嚥下困難感のない症例群において中・下咽頭圧の低下傾向が、嚥下困難感のある症例において中・下咽頭圧が有意に低下していた。中咽頭圧と下咽頭圧は有意な正の相関関係にあり、咽頭収縮筋を支配している迷走神経の運動核であ

る疑核に障害が早期から存在する可能性が示唆された。

5. 中咽頭圧と筋力低下出現後の期間には有意な相関関係にあり、筋力低下出現時から指数曲線的に中咽頭圧が低下しはじめていることが示された。すなわち嚥下困難感出現時には中咽頭圧が著明に低下している可能性があり、嚥下困難感が出現した場合、嚥下造影検査や嚥下圧などによる詳細な嚥下機能評価を行うべきであると考えられた。

以上、本論文は球脊髄性筋萎縮症の嚥下機能障害像とその進行パターンを明らかにし、対応法について考察した。球脊髄性筋萎縮症は未だ治療法の確立していない疾患であり、肺炎が患者の予後を左右するとされていることから、嚥下機能障害像の解明は患者のQOLと生命予後の改善に貢献するものと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。